



淀川の治水翁 大橋房太郎伝

小川清（著）／東方出版／2010年

大橋房太郎は万延元年（1860）に現在の大阪府鶴見区に生まれた。実家は大庄屋であり、幼い房太郎もその家に相応しい人物になろうとしたのか、勉強に励んだ。

はじめは法律家をめざしていたが、明治18年（1885）の淀川大洪水で地元が甚大な被害を受けると、淀川治水に生涯をささげる決意をする。この時25歳。身長145cmとかなり小柄だが、声勢すさまじく地元の戸長、村長、府議会議員を歴任し、その間、淀川治水を実現するために、陳情、陳情、また陳情と、ついには「陳情の神様」と呼ばれるにいたる。

明治26年（1893）、帝国議会で河川法が成立し、淀川改修が決定すると、今度は新水路を建設するための土地収用に奔走する。

晩年、当時内務大臣だった後藤新平から、「治水翁」の称号を贈られたが、昭和10年（1935）に胃がんのため74歳で死去。淀川治水に生涯をかけた人生だった。

平岡珈琲店の三代目店主という著者は、房太郎の業績を再評価するため本書を執筆したという。小説調に書かれているので読みやすく、大橋房太郎がどのような人物か、よく理解できた。

ただし、本書は淀川改修決議にいたるまでの、ある地方政治家の活動を概観したにとどまり、淀川の歴史や自然、淀川をはじめとする大河川改修に必要な河川法の成立過程、また実際に淀川改修に着手した後の技術的な課題や工事の経緯などは活写されていない。それを補うために、以下のような資料を合わせておすすめしたい。

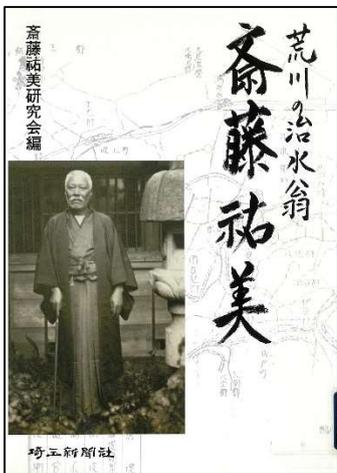
・『沖野忠雄と明治改修』土木学会土木図書館委員会 沖野忠雄研究資料調査小委員会（編）／土木学会／2010年



・『淀川百年史』建設省近畿地方建設局 淀川百年史編集委員会（編）／建設省近畿地方建設局／1974年



・『日本の川を甦らせた技師デ・レイケ』上林好之（著）／草思社／1999年



荒川の治水翁 斎藤祐美

斎藤祐美研究会（編）／埼玉新聞社／2007年

本書は斎藤の業績を研究しようと結成された市民団体が発行したのだが、10人ほどの執筆者の自由なオムニバスで構成されており、これを読んでも斎藤祐美という人物を通時的に把握することは難しいと思う。

ただ、88ページに転載された小学校4年生向けの教材と、90ページ掲載のさいたま市教育委員会が作成した歴史散歩コース用掲示パネルの説明文がわかりやすかったので、それらから斎藤の業績をまとめてみた。

「斎藤祐美は慶応2年（1866）、北足立郡飯田村新田（今の太宮市）に生まれた。この辺りの荒川はぐねぐね蛇行していたので、つねに洪水に悩まされてきた。

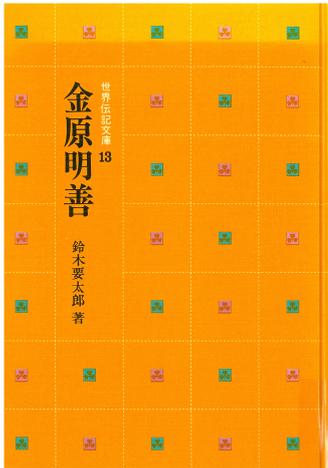
祐美の先祖は代々医者だったが、なぜか彼は新聞記者を経て、明治32年（1899）に埼玉県議会議員となり、以後40年にわたり県政に尽くした。

なかでも、明治43年（1910）の荒川大洪水にあって、荒川上流域の治水の必要性を実感し、埼玉治水会さらには東京埼玉連合治水会を組織して活動に励んだ。

斎藤は、昭和18年（1943）に荒川改修の完成を待たずに77歳で亡くなったが、人々から「治水翁」と称えられた。」

斎藤自身が残した文章はなく、なぜ医者にならずに治水の道を選んだのかはわからない。また東京埼玉連合治水会などでの活動経緯も残されていないようで、残念なことである。

そういった次第なので、当館でも斎藤祐美に関する資料はこれ一冊しかない。



金原明善（世界伝記文庫 13）

鈴木要太郎（著）／国土社／1976年

ある人物の業績、または建設事業のあらましなどを理解するには、手始めに小説など一般向けに書かれた文学を読むのがよいかもしれない。そのうえ、なお興味をもったのならば、史実にもとづいた伝記や専門書に全容と詳細を求めていけばいい。

金原明善は、天保3年（1832）に天竜川右岸の河口に近い、安間村（現在の浜松市中央区安間町）に生まれた。大地主の跡取りであり、子供のころから聡明で、若い時分に氾濫に遭遇したことで、人生を天竜川の治水にささげることに決めた。

少年少女向けの本書は、大人にとっても金原明善を知る第一歩としてうってつけであり、なにはともあれ、自分の全財産を売り払ってしまうほどの治水熱心家ぶりに驚いて欲しい。

いったい、どうしてこれほど治水をはじめとする公共事業に生財をなげうったのか。どうしたら、このような人物に育つのか。知りたくなること請け合いである。金原明善が「治水翁」と呼ばれた記録はないようだが、彼こそその名に相応しいと言える。

ところで、本書収録の「明善の言行録」が面白いのでいくつかご紹介したい。

「明善は、新聞紙を折り、じょうぶなきれいな紙を表にはって、財布にしていた。小さくたくわえる、という心がけの実行である」

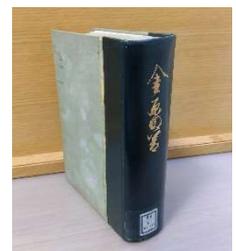
「明善はリュウマチスに罹っていた。このリュウマチスはその後もたびたびおこっている。明善の足は痛かったにちがいない。しかし、明善は、歩きつづけている」

「明善は八十四歳（大正四年）の九月に、痔を手術した。手術するほどになっていたということは、それまでの全国にわたる講演旅行のときにも、痛かったにちがいない」

また、当館所蔵の関連書籍は以下の通り。

・『金原明善』金原治山治水財団（編・刊）／1968年

870ページにもおよぶ大冊であり、明善のことを研究するには欠かせない一書



- ・『金原明善の一生』三戸岡道夫（著）／栄光出版社／2007年

前掲書を底本にして小説風に仕上げたもの。それでも400ページ近くある。



- ・『金原明善 日本の<偉人>を捉えなおす』伴野文亮・渡辺尚志（編）文学通信／2023年

地域史の視座から明善を捉えなおし、新地平を切り開く。

など

